

税を身近に感じた日

小牧市立北里中学校3年 加藤 芳望

身近なようで遠く、遠いようで身近な存在、これが税に対する正直な印象でした。ところが、昨夏の終わり頃、そのぼんやりとした距離感が、ギュッと縮まるような出来事が起きました。祖父が病気になったのです。その後のリハビリを懸命に頑張りましたが、身体の一部が元に戻ることはありませんでした。退院して自宅に戻る日を、誰もが待ち遠しく思っていました。しかし、介護を必要とする祖父が、自宅で安心して生活するには、今までと同じという訳にはいきませんでした。祖父が移動しやすい箇所に手すりをつけ、安全かつ楽に立ち上がることが出来るように電動ベッドを設置しました。また、入浴時の事故を防ぐために浴室の段差を解消しました。これらの住宅改修があったからこそ、祖父は安心して自宅へ戻ってくることが出来たのです。これらの費用のことが気になり、母に聞いたところ、自己負担分以外は介護保険制度で保険給付されたそうです。そこで、介護保険制度をひも解いてみると、財源は保険料と公費で成り立っていることが分かりました。税の使われ方の幅広さに驚くとともに、私はこれまで、自分だけを中心に税の繋がりを見ていたことに気付きました。その狭い視野では、税に対する理解が深まるはずもありません。「もしかしたら、ここにも税金が使われている？」と考える柔軟な発想力が、税をより身近に感じていくことに繋がると思います。

また、退院した祖父にとって、確定申告は大きな難所でした。毎年その時期になると、祖父自身が会場へ行き申請を行っていましたが、それも今の状態では難しくなりました。そこで祖父は母の手を借りながら、会場へ行かなくても申請ができる、e-Taxというシステムを初めて利用しました。申請に必要な書類を手元に用意し、母と二人三脚でインターネットを利用して確定申告をしました。会場の段差を気にする必要もなく、退院後の低下した体力を心配しなくても、例年と同じ様に確定申告が出来たのです。想像していたよりもずっと簡単に、短時間で手続きが終わったと、祖父と母はとても喜んでいました。

祖父とのつながりを通して、以前よりも明確に税を身近に感じるようになりました。そして、税を身近に感じた先に、感謝の気持ちが自然と沸きました。その気持ちの更なる先は、税を快く納めようという気持ちに繋がっていくはずです。幅広い世代の人々が安心、安全に暮らしていくために、様々な場面で税の支えが必要です。その制度を円滑に維持していくためには、一人一人が、税の理解力を高め、感謝の気持ちを大切にすることを忘れてはいけません。私たち世代が日本を支える日は、今よりもっと介護保険を必要とする高齢者が増えているでしょう。将来、私も担い手の一人として、安心で安全な日本の社会を力強く支える人になりたいです。